

2023年6月18日 聖霊降臨節 第4主日礼拝メッセージ

「信頼をもって歩みを起こす」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 8章 40-56節

福音書の中には、数々の「奇蹟」のお話が描かれていますが、今回のお話もそのような癒しの奇蹟のお話でした。聖書協会共同訳では「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」という小見出しが付けられていますが、その小見出しの通り「会堂長ヤイロとその娘さん」のお話と、「イエス様の服に触れる女性」のお話の2つのお話が組み合わさって書かれています。また、このお話は「ルカによる福音書」だけでなく、「マタイによる福音書」にも「マルコによる福音書」にも書かれていますので、どちらのお話も紀元1世紀頃の最初期キリスト教共同体の中では、よく知られていたお話だったのだろうと考えられています。

42節から48節までが「イエス様の服に触れる女性」のお話で、このお話が「会堂長ヤイロとその娘さん」の話の間に割り込む形で、むしろ両側からサンドイッチのように挟み込まれるような形で記されています。もともとは2つの出来事であり、別々の言い伝えだったと考えられていますが、それが人々の間で口から口へと、語り継がれていく間に、この2つのお話は「一緒に聞いた方がいい」と考えられるようになって、サンドイッチされた形で書き記されていったのだろうと思われます。

この2つのお話には、共通点もあれば、対照的な面もあります。第一の共通点は、共に「癒しの奇蹟が起こった」ということ。女性は長年の病気、出血が止まり、少女は死んでいた所から起き上がった、という点です。しかし、その一方で、女性は積極的で行動的なものに対して、少女は終始自分からは何もせず、周りの人たちになされるがままの受け身の姿勢なのは対照的です。また「12年」という数字も象徴的です。会堂長ヤイロの一人娘は「12歳ぐらい」だったとありますが、それは子どもから大人になる年頃であり、当時では女性たちが結婚し始める年齢でした。ちなみにイエス様の母マリアが、イエス様を妊娠し出産したのも同じ位の年齢だったのだろうと考えられています。その一方で、長年病気で苦しんで来た女性が、その病気のために全財産を使い果たしていったのも、同じ12年でした。同じ年月をかけて、一人の人は成人を迎え結婚期を迎え、もう一人はその生活が崩壊してしまいました。これも共通点でもあり、対照的な点でもあります。

イエス様の服に触れた女性は、病気であるということ、血の穢れ^{けが}があるということ、女性であるということなど、様々な理由から穢れている存在と見なされて、差別されていましたので、本来であれば大勢の人たち、群衆達のひしめき合う中にやって来るようなことはなかったでしょう。しかし、この時の彼女は必死でした。「マタイ」と「マルコ」には、「せめて、あの方に衣に触るだけでも、私は救われると思っていた」と書かれています。正面から、面と向かってお願いすることは出来なくても、後ろから服の裾に触れるだけでもいいから、という必死な願いだったのでしょうか。

女性がイエス様の服に触り、イエス様は「誰かが私に触れた」と言いますが、ここで「触れた」と訳されている言葉ハプトーは、「軽く触る」という意味ではなく、むしろ「しがみつく」「抱きつく」「ハグする」という意味の言葉ですから、イエス様の服の裾をギュッと握りしめ、しがみつき、抱きしめたというような状況だったのかもしれない。そしてイエス様から問われて、隠しきれないと思い、震えながら出て来て正直に話した女性に対して、イエス様はその行動を咎める^{とが}こともなく、また周囲の人たちにも、律法違反で非常識な行動をとった彼女を断罪するように言うこともなく、ただ「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」（48）と言われました。続いて、会堂長の娘さんの方ですが、イエス様がこの女性と話をしている間に、息を引き取ってしまったと使いの者がやって来て告げました。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩^{わずら}わせることはありません」（49）。その知らせを聞いて、会堂長もイエス様にお断りを入れたのかもしれませんが、イエス様は「恐れることはない。ただ信じなさい」と言って、予定通りヤイロの家に行きました。そして、イエス様が寝ている娘の手を取って、「子よ、起きなさい」と呼びかけると、霊が戻り、息を吹き返し、彼女はすぐに起き上がりました。それからイエス様は、何か食べ物を与えるように指示をされました。

さて、これらのお話が現代を生きる私たちに告げていることは何でしょうか。イエス様は、どんな医者も治せなかった病気をたちまち治された。また死んでしまった人ですら、瞬時に生き返らせる超能力を持っていた。だから、私たちはそんな神の子イエス様を決して疑うことなく信じましょう、ということでしょうか。そんな単純なことではないはず。もしもそうであるならば、福音書に書かれている出来事以降のこの2000年間に、なぜ治らない病気があり、死から生き返った人がおらず、ずっと死なずに生きている人が誰もいないのでしょうか。聖書が語る「信仰」「癒し」「救い」は、そんなことではありません。例えば、この100年の間に、世界では

医療技術は大きく進歩して、平均寿命も延びました。乳幼児の死亡率もぐんと低くなりました。しかし、今でも不治の病は沢山ありますし、未解明の難病も沢山あります。3人に一人は癌になるとも言われています。長年、信仰生活を送り、熱心にお祈りをしている人が、病気にもかからず、事故にも遭わないかという、そうとも限らないのが現実です。イエス様が言われる「あなたの信仰があなたを救った」とは、どういう意味なのでしょう。「あなたが病気になったり、事故に遭ったりしているのは、あなたの信仰が足りないからだ」と言われているのだとしたら、それはあまりにも酷ではないでしょうか。同じ年齢でも元気な人もいれば、病気の人もあります。同じ病気でも治った人もいれば、悪化して亡くなった人もいます。その違いは何なのでしょう。奇蹟が起きたか起きなかったか、神様からの祝福や恵みがあったかなかったか、ということなのでしょう。

クリスマスに、12歳くらいの少女マリアから生まれたイエス様は、決して超能力者ではありませんでした。あくまでも、私たちと同じ人間であり、無力な赤ちゃんでした。イエス様がなされたことは、普通の人たちには出来ない特別なことではなくて、やろうと思えば誰にでも出来ることでした。徹底的に普通だった……。でもそこに不思議なことに奇蹟が生じた。だから、私たちにも同じように出来るかもしれない。イエス様は、そのことを私たちに身をもって示してくれているのだと思います。釜ヶ崎で聖書を翻訳し直している本田哲郎神父は、「信仰」という言葉を、単に心の中で思うこと、願うこと、信じることではなくて、「信頼をもって歩みを起こす」と訳され、実際に行動を起こすことだと言われています。12年間の長きに亘って、出血の病気に苦しんで来ていた女性は、思い切って、信頼をもって歩みを起こし、イエス様の服の裾にしがみつきました。それまでずっと病人として、女性として、穢れけがている存在として、周りから蔑さげすまれ、のけ者にされ、排除される側に立たされ続けて来ていた彼女が、自らの判断と行動で歩み出した時に、彼女自身の身に変化が生じ、奇蹟が起こりました。「娘よ、あなたが信頼をもって歩みを起こしたことが、あなた自身を救ったのだ。安心して、これからは自分自身の命、人生を歩んで行きなさい」。イエス様はそう言われたのではないかと想像します。

43節には、「医者に全財産を使い果たしたが、誰にも治してもらえなかった」とありますが、「治してもらえなかった」と訳されている言葉テラペウオは、「手当してもらえなかった」です。イエス様はいつも直接的な触れ合いによって「手当て」をされていました。ここでは女性の方から「しがみつく」ことで、触れ合い、交流が生じ

て、その結果として癒しの奇蹟が生じたのだと思います。またヤイロの娘さんについても、死んでいたのか、死んだように眠っていたのかは分かりませんが、イエス様がその手を取って、「起きなさい」と声をかけると、彼女は起き上がりました。家は裕福でしたので、当然、食べ物にも困っていなかったと思いますが、そのような中でもあえて食べる物を与えるようにイエス様が指示をされているので、この少女は拒食症になっていたのかもしれませんが。結婚期になったということもあり、家柄や社会的身分などもあったこともあり、父親同士が取り決めた望まない結婚の話などが背景にあったのかもしれませんが。それまでの自分自身に死ななければならない、結婚して妻としての生活に身を投じなければならない……。その結果としての病気だったのではないか、などの推測も出来ます。町の有力者である会堂長の父親を始め、彼女の周りに沢山の人はいたけれども、直接彼女と触れ合い、心を通わせるような人はいなかったのかもしれませんが。そのような中、イエス様は直接、彼女の手を取り、呼びかけられ、彼女を引き起こされました。

今もなお、私たちは様々な病気に苦しみ、事故や災害に思い悩んでいます。大きな喪失や不安を抱える中で、時には「こんなに苦しい中、死んだ方がマシだ」と思ったり、「これまでの自分は失われ、死んでしまった」と思ったりすることも、誰にでもあることだと思います。しかし、たとえそのような時でも、誰か自分の手を取ってくれて、隣にいてくれて、心から耳を傾けて話を聴いてくれて、一緒に歩いてくれる同伴者がいてくれれば、私たちはそれまでの役割や立場に囚われることなく、それらから解放されて、それらを乗り越えて、新しい自分、新しい命、新しい人生を歩み出して行くことが出来るのではないかと思います。

病気や事故などで失われたものは戻って来ません。亡くなった人は生き返って来ませんし、切除した臓器や失われた器官が戻って来ることもありません。それでも、そこから新しく歩み出し、生き始め、出会っていくということもまた、確かにあり得るのではないかと思います。そしてふと振り返ってみた時に、今の命が与えられているということ、隣り人たちの中に、今生かされているということ自体が、紛れもない一つの奇蹟なのだということに気付くことが出来るのではないのでしょうか。

全ての命を創られた神様が、いつも一緒にいてくださるということ、私たちは神様の中に生かされているということに信頼して、今出来ることをやってみること。小さな一歩で構わないので、信頼をもって歩みを起こしてみること。その中で、私たちは今も生きておられるイエス様と出会い、日々小さな奇蹟と出会っていきます。